リーエンダ with TENA

Vol.6 様々な視点からとらえる排せつのケア

「より良くするチャレンジ」のために

2021年も半年を迎えて、ようやくワクチン接種が進んできたことで明るい兆しが見えてきたように感じています。現時点におきましては引き続き、「感染対策」や「現場スタッフの皆さまの業務負担の軽減」を最優先課題として取り組んでおられるお客様も多いことかと存じますが、排せつケアを見直していくこと自体が、感染リスクの低減や患者様・ご利用者様へのケアの質の向上と業務負担の軽減の両立に大きく寄与できるものと考えています。今回のリーエンダ第6号では、全国老人福祉施設協議会 役員/特別養護老人ホーム「味酒野ていれぎ荘」施設長の窪田里美様に、『排せつケアへの取組みの考え方・進め方』についてご自身の経験談も踏まえながら、現場目線からの発信をしていただきました。加えて私とのオンライン対談の内容も記載しておりますのでお読みいただければ幸いです。また先回の第5号では、21年度介護報酬改定で拡充された「排せつ支援加算」の情報についてご紹介いたしましたが、今号では引き続き、排せつ支援加算への取り組みと併せて算定したい加算として、介護保険施設（介護療養を除く）に新設された「自立支援促進加算」についても、内容のエッセンスと重視点についてまとめています。排せつ支援加算と同時に取り組まれることで、より高い改善効果を生み出せるものと理解しています。未だコロナウィルスの感染収束には至っておらず、医療・介護の現場では大変なご苦労が続いていることとお察しいたしますが、加算算定への取組みが新たな未来に向けての勇気ある一歩を踏み出す機会となればと願っております。

私たちユニ・チャーム メンリッケは、企業としてのパーパスとして「企業活動を通じて、たくさんのハピネスを創造する」を掲げています。お客様と共に、かかわる全ての皆さまにとっての幸せをいつも高められる存在であることを念頭に、新しいチャレンジを続けてまいります。今号をお読みいただいたことを機に、担当TENAアドバイザーに対して改めてお取組みのご要望をいただければ幸に存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

ユニ・チャーム メンリッケ株式会社
代表取締役社長　森 田　徹

快適な排せつを共に目指す

4月の介護報酬改定から間もなく3カ月です。新型コロナウイルス感染症の感染対策と並行して、加算算定や自立支援に向けたケアなど現場では様々な取組みをスタートしていることと思います。今回は全国老人福祉施設協議会の役員で、排せつケアに取組む特養「味酒野ていれぎ荘」施設長の窪田里美さんに、自立排せつの考え方や取組みのポイントを解説いただきました。

- 2ページ、3ページ　**窪田さんインタビュー「利用者と職員が笑顔になる排せつケアのために」**
- 4ページ　**「「排せつ支援加算」と併せて算定したい自立支援促進加算」**

以上の情報をお届けします。

窪田 里美さんに聞く

「自立排せつ」を始めよう
利用者と職員が笑顔になる排せつケアのために

（全国老人福祉施設協議会 役員/特養「味酒野ていれぎ荘」施設長）
窪田 里美（くぼた・さとみ）
看護師、居宅介護支援専門員。病院勤務を経て、その後、特別養護老人ホームで24年勤務。2003年に「えひめ排泄ケア研究会」の立ち上げに携わり、現在でも年1回、合同勉強会や事例発表会を行うなど愛媛県での排せつケア技術向上に取組む。全国老人福祉施設総研委員、四国・愛媛県老人福祉施設協議会理事・愛媛排泄ケア研究会中予支部長などを務める。

介護施設等で算定できる「排せつ支援加算」は、2021年介護報酬改定で見直されました。ポイントは▽算定期間が撤廃され、継続的なスクリーニング体制を評価する全利用者対象の加算体系となった▽加算の大きいアウトカム評価の新類型が追加された――などで、すべての利用者の排せつの自立を目指す「スクリーニング体制」と「改善効果」の両方面の評価が明確になりました。ただ、昨年度までの旧制度での同加算算定率は低く、特に特養で4.17%（第183回介護給付費分科会資料より）と低調でした。新しい加算体系の中で「改めて自立排せつとは？」「排せつケアとの向き合い方は？」。全国老人福祉施設協議会役員で、排せつ支援加算を算定する特養「味酒野ていれぎ荘」施設長（松山市）の窪田里美氏に聞きました。

多職種で排せつに関わる動作を細かく評価してみよう！

自立排せつの支援とは「排せつ行為」の前後にある▽利用者に便意・尿意を聞く▽ベッドから離床し、立ち上がり歩く・車いすで移動する▽便座に座る▽トイレのカギを閉める▽用を足した後に拭く▽衣類を着脱する▽手を洗う――などを一つ一つ丁寧にアセスメントすることが大切です。

また、自立排せつに繋げるには、移動や座位などの運動機能のほか「口から食べる（摂食）、飲む（嚥下）」「食物繊維や水分量（栄養）」のように栄養士や歯科衛生士、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士など多職種が、それぞれの専門的視点で利用者の生活全体を評価していくことも重要です。

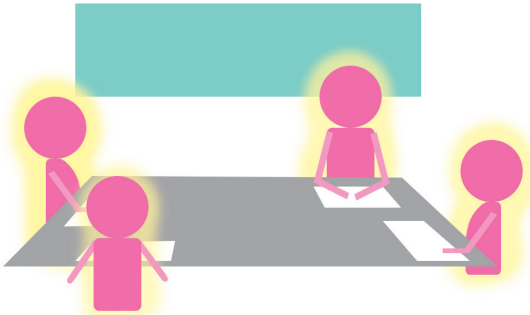
排せつケアは多職種で行うケアで、評価する視点も細分化していることがわかります。ほかの自立支援に比べて、排せつケアは効果を実感するまで時間がかかりますが、１つでも利用者自身でできる動作を増やすことが、自立への第一歩です。今回の報酬改定で算定期間が撤廃されたことで、長期的に取り組みやすくなったと言えます。

排せつスケジュールなど医療介護が連携して個別に分析

また、医療と介護の両視点で排せつ状態を評価するのもポイントです。例えば便が出にくい利用者の場合、「出すこと」を目標に計画を立ててしまいがちで、便秘だと判断されて下剤を使用するケースが多いと思います。しかし、誤った下剤の使用は下痢やそれに伴う脱水に繋がり、利用者自身もケアをする職員にとっても、大変負担が大きいです。

医療職が利用者の状態を分析して、数日様子をみたところ下剤を使用せずに健康な便が出たら、「数日ごとの排便がその利用者の適切な排せつスケジュール」と判断できます。

このように、多職種で評価・分析することで、個別性の高いより適切な自立排せつケアに繋げることができます。排せつ支援加算の算定を、施設での排せつケアの状態、利用者の希望に沿ったケアが実践できているか見直すきっかけにしてはいかがでしょうか。



事例　ノーリフティングで利用者も職員も快適な排せつ支援

私が施設長を務める味酒野ていれぎ荘では、2019年から排せつ支援加算算定に取組んでいます。最初は職員全体で話し合い、自立排せつの理念を決め、次に研修の一環として、職員に実際におむつに排せつしてもらい、不快さを経験することで、より快適な排せつケアの必要性を体感してもらいます。参加者は「排せつはとてもデリケートで、できれば人に任せたくないこと」ということを学びます。

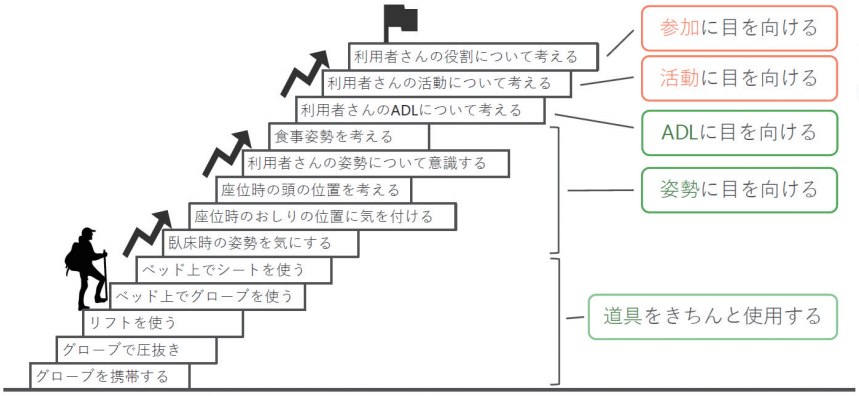
その上で、排せつに関する利用者の希望をヒアリング、必要に応じて3日間の排せつ日誌を作成するなどして排せつパターンを掴み、トイレ誘導に繋げます。これまで、寝たきりやおむつに排せつしていた人にも1日最低1～2回はトイレに誘導して「おむつが当たり前の生活」からの脱却を促します。

また、ノーリフティングケアの取組みにより、利用者も職員も快適な排せつケアを目指しています。トイレ誘導が増えることで、離床・移乗・移動介助などの機会も増えるのですが、人力で行うと腰痛リスクや、利用者の拘縮など二次障害の恐れもあります。

例えば立位保持式リフトを活用することで、車いすからトイレへの移動をスムーズにし、排せつしやすい前傾姿勢の保持が実現できました。

スムーズなトイレ誘導でおむつへの失禁が減り、排せつの失敗を恐れなくなる中で利用者の外出意欲が高まり、利用者の生活範囲が広がっていきました。排せつケアに取り組むことで、身体機能などADLの改善の先にあるIADLの実現や、活動や参加も含めた支援もできるようになっています。

こうした取り組みが要件となる、新設加算「自立支援促進加算」（4ページ詳細）も算定する予定です。



「排せつは便所でするものだ」

初めて聞いた本当の気持ち

排せつ支援に取組むにあたり、入居者全員に排せつのヒアリングを行いました。その中で、印象に残っているのは寝たきりでおむつに排せつの利用者が言った「排せつは便所でするものだ」という一言です。

これまで、その利用者とは長く関わってきましたが「トイレで排泄する」という希望を聞いたのは初めてでした。私たちは「なぜ早く聞かなかったのか」と後悔しました。

その後は、座位を保つリハビリを行い、介助しながらトイレに誘導しました。トイレ排泄したときの、利用者の嬉しそうな表情は忘れられません。

特別対談

「味酒野ていれぎ荘」
窪田　里美 施設長
浅野　俊江 相談員

×

ユニ・チャーム メンリッケ
代表取締役社長
森田　　徹

5月14日（金）にオンラインにて特養「味酒野ていれぎ荘」の窪田里美施設長、浅野としこ相談員と、ユニ・チャームメンリッケ代表取締役社長の森田徹の特別対談を行いました。介護現場で求められる自立排せつの実現に向けた、それぞれの取組み方法を語っていただきました。対談の全文はシルバー産業新聞社ウェブサイト「ケアニュース」に掲載中です!

森田徹社長　ユニ・チャーム メンリッケはスウェーデン生まれのオムツメーカーです。「①尊厳への配慮②個別ケア③自立支援」の3つの柱に基づいたケアの提唱、商品開発を行ってきました。

排せつケアに取組むことで、ご利用者の自立だけではなく職員の育成や、業務環境改善に繋げることができます。「排せつをチームで支えよう」をテーマに、ご施設の方と「コンチネンス・サポートチーム」（CST)を立ち上げ、当社はサポートとして二人三脚で取組んでいます。

窪田里美施設長　排せつケアを重視する点は同じですね。私たちの特養が愛媛県松山市の特養で唯一「排せつ支援加算」を算定していると、市の職員から聞きました。

介護施設では24時間、十人十色のケアが求められます。多職種がチームで活動し、それぞれの専門知識から利用者を評価することで、より良いケアが実現できます。

浅野俊江相談員　特に気を付けているのが、特養は自立の入居者は少ないため、施設として「自立」の考え方を鮮明にすることです。利用者が自分のタイミングでトイレに行くなど、今までできなかったことが1つでもできるようになることが、生活を豊かにすると考えるからです。

窪田施設長　そのためには職員に排せつケアの重要性を理解してもらうための継続した育成も必要です。自分が「してもらいたい排せつケア」の確立を目指していきたいです。

森田社長　その通りです。チームケアの基本は「誰のために、なぜこのような取組みがしたいのか」という疑問を常に持つことです。

そうすることで、通常のケアの中でも小さな変化にも早く「気づく」ことができます。たとえば「そんな大きなおむつ必要なのかな」などです。

窪田施設長　何事も、気づかないと始まらないですよね。確かに、大きなおむつをしていると、服の上からもわかりますし、ムレが発生してしまいます。私たちの施設でも、布パンツへの移行支援をした結果、活動の幅が広がった利用者もいました。

森田社長　自立することは希望が生まれるということ。ご利用者の想いを実現するケアを実践していきたいですね。

注目加算 「自立支援促進加算」

「排せつ支援加算」併せて算定したい加算

介護保険施設に「全利用者×月300単位」の大型加算

2021年介護報酬改定で介護保険施設（介護療養を除く）に新設された「自立支援促進加算」に注目が高まっています。食事、排せつ、入浴などのケアについて、本人の要望に基づき、できる限り「これまでの生活」を維持するように、個別的な支援計画に基づいたケアを実施するため、多職種連携のPDCAサイクルが機能する体制をとる介護施設について「月300単位×利用者数」の算定を認めるからです。100人規模の施設であれば月30万円の収入増となるため、介護施設経営の観点からも大型加算として注目されています。

●医師のアセスメントに基づく、多職種連携のプロセス評価

算定要件イメージは図の通りですが「6カ月ごとに全利用者に医師のアセスメント」「3カ月ごとに医師のアセスメントに基づいて、特に自立支援のための対応が必要とされた利用者に多職種が関与する、生活全般の包括的な支援計画を策定」などについて、取り組み内容を国の運用するデータベースである科学的介護情報システム「LIFE」へのデータ提出をし、フィードバックを活用することを要件とするプロセス（過程）加算です。

●特養の加算算定に期待集まる

この加算はプロセス加算のため、結果・成果を求めるアウトカム加算のような、現場に過剰なプレッシャーを強いるものではありません。

なかでも「介護施設+生活の場」である特養にとっては、本人意思を尊重したケアの実践や、それによる多幸感など数値化や科学的裏付けの難しい内容がプロセス評価される点で、算定することが期待される加算と言えます。

●「食事」「排せつ」「入浴」の改善がポイント

加算算定のポイントは「個別的な支援計画は評価するが、画一的な支援計画は評価しない」という点。

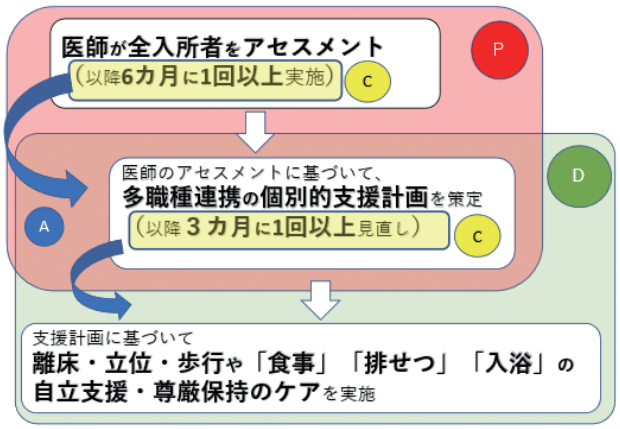
厚生労働省の留意事項では「寝たきりによる廃用性機能障害を防ぐために、離床、座位保持又は立ち上がりを計画的に支援する」「食事は、本人の希望に応じ、居室外で、車椅子ではなく普通の椅子を用いる等、施設においても、本人の希望を尊重し、自宅等におけるこれまでの暮らしを維持できるようにする。食事の時間や嗜好等への対応について、画一的ではなく、個人の習慣や希望を尊重する」「 排せつは、入所者ごとの排せつリズムを考慮しつつ、プライバシーに配慮したトイレを使用することとし、特に多床室においては、ポータブルトイレの使用を前提とした支援計画を策定してはならない」「入浴は、特別浴槽ではなく、一般浴槽での入浴とし、回数やケアの方法についても、個人の習慣や希望を尊重すること」などポイントが挙げられており、特に「食事・排せつ・入浴」の個別的支援計画が求められています。

これとは別の加算で「排せつ支援加算」があります。排せつ自立を起点とした取り組みにより、ケア全般の改善・向上につながることも多いことから、その延長線上の「自立支援促進加算」の算定が近づくと言えるかもしれません。

記事作成:シルバー産業新聞社

自立支援促進加算（全入所者×月300単位）のイメージ

多職種連携によるPDCAサイクルを評価



※これらの内容を「LIFE」にデータ提出、フィードバックを活用

これまでも これからも

私たちユニ・チャーム メンリッケは、Well-beingの想いが込められたTENA製品を届けし、CST（コンチネンス・サポートチーム）活動を通して、スタッフの方々の様々な視点・知識、そして想いを集結し「その方自身の希望や可能性」を大事に共に考えさせて頂いております。これからも皆さまの日々のお取組みが、自然と「排せつ支援加算」の算定やさらなるケアの取組みなどへとつながり、ご本人のQOLの向上はもちろんのこと、スタッフの方々の”介護の仕事への誇りや楽しさ“、そして施設経営に対してもプラスとなるよう貢献させていただきたいと思います。

アンケートのお願い

皆さまとともに、「リーエンダ with TENA」をよりよいものへ

この度、「リーエンダ with TENA」をご覧いただき、誠にありがとうございます。
皆さまからのご意見・ご感想を大切により充実した「リーエンダ with TENA」をお届けしていきたいと考えております。是非、忌憚なきご意見をおよせください。

本アンケートはご回答頂いた方の個人情報（個人名・メールアドレス等）を記載して頂く項目はございません。また、個人の携帯端末からのアクセスであっても個人を特定する情報は収集いたしません。何卒よろしくお願いいたします。

発行日:2021年6月　（発行元）ユニ・チャーム メンリッケ株式会社　〒107-0051 東京都港区元赤坂1-5-12　TEL 03-5772-0190　FAX 03-5772-0191
（企画編集制作）株式会社シルバー産業新聞社　〒542-0064 大阪市中央区上汐2-6-13　喜多ビル　TEL 06-6766-7811

※ 無断での複写・複製・転載を禁じます。

Uni-Charm Mölnlycke K.K.

「リーエンダ」とはスウェーデン語で笑顔を意味する言葉です。